

## 「先生のための夏休み経済教室 in 東京（中学向け）」記録

- 1 日時：8月17日～18日
- 2 場所：東京証券取引所東証ホール
- 3 主な内容は以下のとおり

### ■第一日目 8月17日

- ・主催者挨拶のあと講義が行われた。

### <1 時間目>Basic「新学習指導要領の考え方・教え方」講師：福井大学教授橋本康弘氏

- ・ 次期学習指導要領では、公民は100時間で行うのは変化なし。地理が減り歴史が増えたが社会科全体は変わらず。基本方針は「資質・能力」の一層の重視。「社会に開かれた教育課程」の重視。「資質・能力」の内容は、コンテンツベースからコンピテンシーベースへの転換を意味する。
- ・ 社会科での資質・能力を育てるには、多面的・多角的に考察する授業が必要になる。加えて構想する力を育成することが求められている。その内容は、課題解決に向けて選択・判断する力、説明、議論する力が求められるということである。言語活動のなかに議論し、自他の意見を成長させ、合意形成する力が求められている。ツールミン図式に出てくるような内容を求められている。中学校ではこの図式が作れるようになればよい。この図式を活用できる、そのなかの条件を吟味するのは高校「公共」での課題となろう。その意味では、中学の高校の連携による分担と区分けが必要になる。
- ・ 社会科は内容ベースで議論する力が求められる。その内容は「見方・考え方」から行うことが求められる。それは二つの柱、従来の見方や考え方（概念を知ること）、に加えて道具として使える（社会的課題を解決するために使う）ことの二つの育成が求められる。前者の、概念を使って考察・構想するための視点や方法はすでに平成20年版で導入されていた。それが「対立と合意、効率と公正」である。今回はそれを充実させている。
- ・ 今回は、いままでの概念に加えて、私流に言えば「特出し概念（分業と交換、希少性、個人の尊重と法の支配、協調、持続可能性など）」が設定されていて、これらを活用した学習が求められる。今回は、習得してから活用だけではなく、活用しながら習得させることを目指している。これが平成20年版との違いである。
- ・ では、どのように育成したらよいか。それを「主体的・対話的で深い学び」で整理した。中教審ではアクティブ・ラーニングという言葉だったが、法令審査上通らないので上記の言葉となった。それは社会科ではどのようなようになるのか。

- ・ 中学校はすでに AL に近い内容は取り組んでいた。今回の改訂のターゲットは高校であった。だから「歴史総合」、「地理総合」が出てきた。「公共」が出てきた。
- ・ 見方・考え方のなかの「効率と公正」の例でいえば、これまでの説明では活用できなかった。それで解説に新たな文言を付け加えた。効率と公正に関して指導要領の解説が次のようになっている。(その部分略)。事例では、みかんの分け方の例。効率では回転寿司の例。対立と合意では駐輪場の例などが考えられる。
- ・ 分業と交換では、パンやと農業の関係の例がある。希少性に関しては小遣いと購入の問題が扱われている。ただし、このような場合は事象にあてはめて理解されていることが必要だが、えてして言葉の暗記なりがちで、そうならないか心配である。あくまでも事例に基づいて理解させることが必要になる。
- ・ 新学習指導要領の趣旨を生かした授業事例を紹介する。全 5 次の授業。第 1 次で国や地方公共団体の役割を確認、第 2 次で財政の特色をグラフをもとに理解する。第 3 次で日本の社会保障、公害について考察する。第 4 次で環境税の導入の是非、メリットを多面的に考察する、最後の第 5 次で環境税のよりより税負担について考察する。
- ・ この事例が完全に素晴らしいということではないが、使えてはじめて定着することを力説しておきたい。

Q：希少性に関する疑問、これを中学生に教えていいのか、不足、足りないというのを入れるものなのか。

A：すでに書いてある。今の意見も含めて検討する必要がある。

Q：知識の活用が大事というが、定期考査のなかで知識の活用の問題を作るべきなのか？

A：定着と活用の両面のテスト問題が必要になる。今後現場での工夫が必要になるろう。

Q：多面的多角的に構想、表現するとあるが、政治や経済の順序はどうなるか？

A：指導要領では冒頭部分と最後以外は柔軟でよいとされている。

Q：答えは一個しかない生徒は多くなっている。小学校教育はどうなのか？

A：小学校は意外に多様な答えを見つけさせる授業をやっている。中学校を変える必要があるのではないか。しかし、先生の力量が落ちていて、小学校の授業実態も変わってきている面もあるかもしれない。

Q：知識概念の活用の評価方法は？

A：具体的な学習場面での生徒の活動の観察やワークシートなどから見て行くことが必要だろう。

Q：独善的意見をする生徒をどう評価するか？

A：独善的な議論を吟味するためにはツールミン図式が使える。

## <2時間目>「日本一短い経済史ーアクティブラーニングの作り方ー」

講師：升野伸子先生（筑波大学附属中学）

- 大学で経済学を専攻した。教員になって教科書をみてこれでわかるのかなと疑問だった。また教育について知らなかったなと思った。そこから研究しながらの教員生活を始めてきた。



升野先生の講義風景

- 今日紹介するのは、そのなかで開発した教材。経済を学ぶとき、早い段階で取りこませる課題だと思う。各時代の貨幣を漢字一文字で表現させるというもの。まず、先生方の自分なりの答えを題して欲しい。次に、四人くらいの先生方とつき合わせてみて欲しい。これは面白いというのを作って、前で披露して欲しい。今日はレアものの答えがでてくるとうれしい。
- （何組かがでてきて記入した）。答えは一つではない。いろいろな答えが出てきて良い。自分とは違うのがでてきてよい。そこから対話が始まる。ああこんな考えもあったんだ、自分は考えなかったなと思うことからでてくる。これが教材になる。
- 私だったら、生徒が前に出てきて説明させたい。それに対して質問がでて、討論になれば上出来、でき過ぎと思う。今回のもので言えば、なぜこれを出したのかの理由から、貨幣についての学習、知識を確認することができるのではないか。例えば、石、紙などは材質、米などがでてきたら交換という要素がでてくる。着眼点の差が答えのバリエーションとなるのでないか。
- このあとの学習のなかで今回出てきたような言葉や内容がでてくると、「あそこで活動したな、ああそうだったのか」となるのではないか。例えば、紙幣の箇所、ものが紙になぜなったのかとうまくリンクさせて、なぜ、どうしてという疑問と結びついたら上出来ではないか。市場における取引は貨幣によって行われているという指導要領の文言を具体的な授業の形でできれば上出来。
- 次は、このマトリックスを横から見て、未来のところに注目させたい。これを定期テストで出した。生徒からは板、電などがでた。板はカードの意味だと説明されていて納得。電は多い。ドルという答えもあった。漢字ではなかったから迷ったが○にした。
- 最後の詰めの問題として「あなたにとってお金とは何ですか？漢字一文字で書いてくだ

さい。」という問題にしてもよい。中学生なりに考えて答えると次に行けるのではないか。

- ・ 縦軸、横軸の補足を述べておきたい。横軸では中学校では歴史の時代区分は5つだが、もう少し欲しい。縦軸にはもっと他のアイデアが欲しい。高校の分野に近いが、どんな言葉をいれたらよいのか考えてみて欲しい。貨幣以外では、例えば、運輸。縦軸を三つ出して欲しいなどのお題をだしたい。(答えの一端：税、土地、交易など、政治、社会、文化、芸術などでもよい) 軍事、建物、食べ物などもよい。
- ・ 縦軸、横軸を他の分野でできないか。実習生がやった事例、5年毎の流行語から戦後史を見たものもある。教師のアイデア磨きにもなる。

### 篠原先生のコメント：漢字から学ぶ経済

- ・ 「課題発見」と「課題解決」の重要性が言われ始めて久しいが、先生方の最近の授業案、実践例を拝見していて、とくにアクティブ型の実践で、課題発見と課題解決の間を結ぶ「分析」が欠落しているケースが見受けられる点を懸念している。課題発見でも、生徒の思い付きの印象を集めるのではなく、なんらかの調べや意見交換が必要であろうが、とくに課題解決に向けては、「事実に基づいて、あるいは理論に基づいて」生徒に意見を交わしながら考えさせる、というプロセスである。そのためには、アクティブ・ラーニングといえども、先生が当初から「何を教えるのか」という授業の着地点を定めたい。授業を進めないと、授業によっては生徒の思い付きの意見の集約に終始し、生徒が何を学んだのか、あるいは先生が生徒に何を学ばせたのか、なにもかも曖昧な教育になる恐れがある。これが、最近、私がアクティブ・ラーニング型授業について懸念していることである。
- ・ 升野先生が本日提案された実践も、会場の先生方は、升野先生が何を教えようとしたのか、という観点から見直してみられるよう、お願いしたい。今回の夏の教室で提案されている他の授業実践も、ぜひ、そのような観点から見直して、先生方の参考にしていただきたい。
- ・ 以下は、升野先生の授業例に触発されて、ふと思いついた私の提案。「漢字を手がかりに経済を学ぶ」ことは、意外に有効なことかもしれない。漢字は表意文字、だから経済の用語や概念をくどくど説明する前に、漢字の意味から迫ってみると、経済の制度、働き、政策などの本来の意味がスーッと理解できるかもしれない。しかもそれを上手に使うと、結構有効な「授業のつかみ」になるだけでなく、国語学習と経済学習の *infusion* になるかもしれない。
- ・ 経済行動、概念、制度などすべて漢字で表している。市場、需要、供給、価格、生産、雇用、所得、など。

- ・ 今日、ここで皆さんに投げしてみる例として、「おカネに関わる漢字は、その大多数が「貝」という文字を含んでいるが、それはなぜだろうか。
- ・ おカネのキーワードは「貝」である。貨幣、貸借、消費、貯蓄、投資、費用、・・・。
- ・ その理由、背景。古代中国を代表する国に殷と周がある。周は大陸内部、現在の西安の辺りより西。殷はその周に滅ぼされるが、少し東、現在の安陽の辺りで遺跡（＝殷墟）がでている。ある研究によれば、殷は貝の文化、周は羊の文化だという。殷では、農耕中心、様々な農作物を作る。そして、その交換手段として、海岸地域から運んできた子安貝の貝殻を貨幣にしていた。交換が中心なので、様々な物質的なものに価値を置く。よって宗教も多神教である。
- ・ 一方、周は黄土平原から西の乾燥地帯。食物の栽培は難しく、現在のイメージでいえば蒙古に近いような、天だけを崇める一神教、そして羊である。だから義を重んじ、議を好む。犠牲、儀式、儀礼、・・・ と、「羊」を含む漢字が社会の核となる概念や制度になる。
- ・ 殷の「貝」に戻れば、需要は買うことだが、そう考えれば、教科書で「需要量は価格で決まる」と決めつけて需要曲線を描いてみせるが、これは極めて危険な教育であることが分かって。買うという行為は、価格だけでなく、実際の世界でも様々な要因に依存しているのに、それを押さえつけて、需要は価格できまると教えてはいないだろうか。
- ・ 売という感じも、旧漢字では、そして現在でも台湾や香港でも「賣」とかく。売る行為、つまり供給も貝とかかわっている。貧、賓、寶（＝宝）、貴賤、・・・、とまだまだ「つかみ」に使えるような漢字はいくらでもある。
- ・ ちなみに、商人、商業、商い、・・・の「商」も殷から出た言葉。殷の都を商と称していたが、その殷が周に征服され、殷の人々＝商の人々が各地に離散する。そしてその離散先で、故郷「殷」で消費していた品物を仲間通しで交換し始める、そして最終的には遠隔地の殷人との交易も始める。それが商業（商人の生業）であり、扱う品が商品と呼ばれるようになった。このように、漢字の語源を辿れば、現代の経済用語や制度、概念の意味を具体的に理解できるケースが多い。

Q：中学生は漢字の意味を知らない。貝に注目させられないが、どうすればいいのか？

A：私は漢字学者でも国語教育の専門家でもないので、その問題はどうすれば解決できるか、よく分からない。先生方が個々に判断されて、「授業の捨てネタ」や「つかみ」に使えるようなものに絞るというのではだめだろうか。

Q：もっと升野先生の実践事例を知りたいが他になにかあるか。

A：明治図書の本などに書いている。学会発表もあるので見て欲しい。たこ焼き屋の事例、年金の事例も日本経済教育センターから教材化してある。それぞれ参照して欲しい。

<3 時間目> 「経済学習から主権者教育へ」 講師：立命館大学他 河原和之先生

- ・ 指導要領はいわゆる勉強できない子についてはあまり問題視されていない。社会科は「すべての生徒が参加する」ユニバーサル型授業が可能である。主権者教育についても、できる生徒だけでなく、全ての生徒が投票行動ができる教育でなければならない。
- ・ 東京ネタです。原宿駅と巣鴨駅のどちらが乗降者数が多いのでしょうか。少子高齢化を反映し巣鴨駅が多いようです。時代は変化します「四大工業地帯」「人民公社」「ドーナツ化」というワードは死語になりました。という意味でも、暗記社会科はあまり役立たないことがわかります。大切なのは見方・考え方です。“なぜ都心回帰が始まったのか？”キーワードは、女性の社会進出、便利さ、デフレ、高層ビル、高収入、職住一致、1ルームマンション、コンビニ、スマホから考えることができる。都心でベビーブームも起きています。”ドーナツ化“から”あんばん化“へと時代は変化しています。
- ・ 本題の主権者教育です。先日の大杉先生講演のなかの主権者教育の目的は、「なぜそれが社会にとってよいことか正しいことなのかという倫理的判断を伴うことになる」とお話しされました。
- ・ 例えば、開発途上国にいった折に援助を呼びかける少女に、援助しなかった私の「冷たい」行動の背景にあるものを考えさせる。ここから“自立”するための援助という「見方」「考え方」を育てることが主権者教育である。
- ・ チョコレートを切り口に考える授業例もある。「森永製菓と明治製菓どちらのチョコレートを食べるか」と聞く。児童労働とカカオに注目させる。森永は学校建設を含め児童労働没減にむけ、チョコレート1個につき1円を援助する取り組みをしている。生産者にちょっと思いを寄せ、少しは援助できればという気持ちを持ち、行動することが「エシカル」である。ちなみに、明治は、企業としてCSR活動で環境保護や児童労働廃止運動の支援をやっている。
- ・ ケイタイ、スマホの事例。そのなかのレアメタルの事例。「次の数字（金16%など）は何か」と聞く。答えは世界の金属のなかの日本の比率で都市鉱山といわれる。次は希少金属の価格についてのクイズを行う。児童労働がありコンゴ共和国東部で希少金属が紛争資源となっていることにもふれる。（「朝日新聞」16年8月24日）
- ・ スマホの裏側を知らないお父さんに教えるロールプレイを行う。いろんなやり取りから「児童労働」「紛争資源」「都市鉱山」を再考させる。東京オリンピックのメダルは回収

金属でつくろうというキャンペーンが始まっている。全国 7000 箇所での回収ボックスが設置されている。「知る」「わかる」だけでなく「ちょっと行動する」ことに通じる。また、回収した部品は、一度は廃業した秋田県小坂銅山で精錬する。昔の蓄積した技術を再活用する事例である。

- 次の事例は、ふるさと納税。クイズに挑戦。そこから地域の特徴を学び、自分たちが納税したい自治体を選択する。返礼品の注目するのはしかたないが、子育て支援や震災支援など用途により選択する生徒もいる。沖縄県はほぼ返礼品はないが、583 件、8071 万円のふるさと納税があった。どんな人なのか？沖縄出身者、基地の負担に対する還元、遺言、大口寄付もある。個人で選んだ上で、グループでダイヤモンドランキングをする。その理由を書かせることにより「見方」「考え方」を鍛える。これが経済から考える主権者教育ではないか。
- 他にこんな実践もある。本は街の本屋さんから購入するか？電力自由化はいいことか？公共施設を民営化してよいか？(TSUTAYA の図書館)、など。ここから、街の本屋さんが生き延びる道を考えるという授業をつくる。
- あなたのちょっとした行動が、世の中を少し変える！エシカル行動は「自分にいい」「社会にもいい」「世界にもいい」「将来にもいい」「すべての生きものにもいい」でも継続はなかなか難しい。だからちょっと行動する。そこから社会の変化がはじまる。

#### 加藤先生のコメント

- あえて問題提起をする。もし自分ならどう見て行くか？
- 紛争金属のケース。武装勢力に関するデータなどはどこまで確実か。武装勢力が民主化をスローガンにしていたらどうするか。それを科学というかどうか。常識から見て良いのか。休眠技術を使うというが、小坂町は人口が減っている。いいことがあっても逆がある。
- 普遍的な事例の例、アメリカの医療保険の例。オバマケアの例。そこから医療保険はいい、再分配は是認、大きな政府はよいとなる。そして、国会議員は自ら補助金の削減は主張しない。
- 果たしてそうか。日本の基準でアメリカを評価していいのかということである。医療支出の突出。州による違いが大きい。私が、アメリカで事故にあった時、250 万円の請求がされた。医者の方箋は売薬を買え。医者に紹介されても 2 ヶ月待てという現実はある。メディケイドも日本との違いは大きい。そんな違いをはっきり認識して、考える必要があるのではないか。
- 主権者教育では、公共選択に注目すべき。非市場的決定の分析ができる。アメリカでは

共和党議員が多ければ多いほど、補助は減る。つまり、補助を減らすのが民主主義という考え方もあるということである。日本の常識で倫理的判断をしてよいかどうかは吟味の余地があるのではないかということである。

Q：市場原理を越えた選択としてふるさと納税とあるが、それで良いのか？公務員が本来の仕事を放棄しているといえないか？

A：自分の立ち位置で判断する。政府の役割は全体の構造を考えるもの。たしかに、質問者の意見もわかるが、いまあるわけだから、それをどう考えるかということが必要ではないか。役割分担をロールプレイで入れることでさらに考えさせることもできるのではないか。

Q：教科書はどう使っているのか？

A：投げ入れ授業でこんな事例をやっている。教科書は使っている。

Q：主権者教育の概念はどのようなのか？

A：河原：主権者というのは政策判断ができる人間と考えている。狭い意味での主権教育とつながるものである。

加藤：政策判断できる生徒を育てることが主権者教育だと考えている。ムードで考えることではダメである。また、主権者教育をやったことに対する評価（本当に成果があがったかどうか）をしておいて欲しい。

#### <4 時目> 記念講演「中学生に教えた経済的な見方・考え方」

講師：大阪大学社会経済研究所教授大竹文雄先生

(1) なぜ経済的な見方や考え方を学ぶべきか

- ・ 錯視
- ・ 直感的意思決定
- ・ 意思決定のバイアス

(2) サンクコスト

(3) 合理的推論

- ・ 数あてゲーム
- ・ 他店対抗チラシ

(4) 金利と現在バイアス

(5) 損失回避

#### ■ 第二日 8月18日

<1 時間目> 「公民教育の理解の仕方・教え方」同志社大学教授 野間敏克先生

- ・ ネットワーク 12年の活動の振り返りを含めて解説したい。2011年の講義では教科書を解説した。新しい教科書で分析する。



- ・ 現行教科書と指導要領
- ・ 変わってきた部分、ストーリー性がでてきた。労働者の扱い。活動型の授業が求められている。指導要領で求められている。資質・能力、思考力・判断力・表現力等、学びにむかう力・人間性まで求められている。総合力が求められているが、ネットワークの取り組みもそれにリンクしている。「対立と合意」「効率と公正」がはいった。新しいものでは「分業と交換」「希少性」が入る。貨幣の役割、フィンテック、起業、会計情報、ワークライフバランスが入る。構想という表現が入る。構想の内容は社会の仕組みづくりにどのように参加するかを考える程度。高校では、議論しながら一段と深めた仕組みを考える。
- ・ 現実の指導に関して。現実の諸問題に対処する力が一段と求められる。身に付けることができるように指導する。そのために社会的な見方・考え方を重要。経済概念の学習が教師に必要。教材が有効。
- ・ ここから経済学の考え方の話。経済学の考え方の基本5つ。①登場人物は合理的個人、②分業と交換のしくみ、③市場の効率性は世の中をよくする、④市場には限界がある、⑤政府の失敗もある、の5つである。民間が作る仕組みと政府が作る仕組みの混合で現実の経済は動いている。よい仕組みとは何かに関しては、効率性と公正性、安定性などが判断基準になる。以下、項目別に説明する。
- ・ 消費者と政府。
  - ・ まず、お金の使い道を考える。家計調査を使う。賢い消費者になろうと教科書には書いてあるが、本当に合理的かどうか。消費者と企業の関係では本来はどちらもうれしいはずだが、そうっていないケースもある。情報の非対称性から。消費者保護の必要、でも変化している。ネット情報などで価格が競争価格に近くなっている。デジタルデバイスで格差も出ている。ニセ情報までもある。介入の必要や仕方が変わってきている。消費生活と流通も現在は変わってきている。まとめの表を提示する。これは教師だけでなく、生徒の考えにも使える。
- ・ 労働問題と政府
  - ・ 中学生への労働の導入には発達段階に応じて。なぜ働くかなどから、どんな職につきたいか（ランキングを提示）。現代の調査はかなりユニーク。どの職業がどのくらい所得がえら得るか。生涯賃金のデータが使える。働き方の問題も扱う。現状、働き方改革。同一労働同一賃金。長時間労働是正。労働の仕組みの変化の図を参照してほしい。
  - ・ 社会保障制度
    - ・ 中学生への導入。四つの制度を教える前にリスクについて聞いてみるとよい。対処の仕

方にはどんなものがあるかを聞く。貯金、保険など、個人が第一、それでカバーできないものを政府がやる。社会保障の給付と負担を抑えておきたい。社会保険の財源構造を知っておいて欲しい。6割保険料。それを事業者と個人の折半。年金制度で一番シンプルなのは自己責任積み立て方式。積み立て方式でもみんなで協力しない制度、同世代同士の保険もある。日本は今、実質賦課方式。若い人がそのときの高齢者を支える。厚生労働省の宣伝戦略（世代を超えた助け合いに見える）があるが、実際は違う。実際は強制的な助け合いである。年金の世代会計は今、政府は出さなくなっている。改革がされているが抜本的な改革にはまだなっていない。社会保障における経済学的発想の図を参照してほしい。

- ・ 貨幣・金融・政府
- ・ 生徒の導入例 1000円札を見てなぜ買い物ができるか、隣の人と交換できるか。買い物リストを書く。それが交換できるか。なぜ交換できないか。そこから貨幣の役割、何が貨幣になるかなどを考えさせる。貨幣の機能と起源をここから考えさせる。現代のお金は圧倒的に預金口座である。通帳に書かれた数字がなぜ貨幣でありうるのかを考えさせる。預金による支払い・決済、為替の仕組みが支えている。その背景は信頼。信頼が切れたらだめ。新しい支払い手段と現金や預金リストの表。貨幣信用における経済学的発想の図をそれぞれ参考にしてほしい。

Q: 年金は本当に大丈夫かと聞く生徒にどうすれば答えるのか？インフレになった時のお金は？

A: 厚生労働省の見通しでは年金は持つだろう。だから年金に入ったほうがよい。でも税金はあがるだろう。インフレはわからない。昔の常識ではインフレ。デフレのほうが現実的。いつインフレになるかはわからない。

Q: ビットコインをどう説明するか？

A: ブロックチェーンというものを信用して使っている。それ以上はわからない。

## 2時間目 「株式を通じて経済を理解しよう」

講師: 鈴木深 (東証金融リテラシーサポート部課長)

- ・ 東証の紹介からはじまる。日本証券取引所グループになった。取引所の紹介。昔、今、やっている仕事の紹介が行われた。
- ・ 東証が準備している各種教材やサポートが紹介された。
- ・ 教材の例①「シェア先生と学ぶ 株式会社のしくみ」ロールプレイを導入した教材。おかしな会社を作りたいと思った女性。そこから金融の仕組みを紹介する。金融とは、間接金融と直接金融、株式会社の目的と役割、会社の仕組み、会社をつくりたい（ここで

ロールプレイ：お金をどう集めるのかを先生方の参加で行なった。）

- ・ 教材の例②「シェア先生と学ぶ 社会や経済の動きと株価」ここから株価の決まり方、原則、株価の動く要因の説明、そのうえでゲーム（ブルサ）を使って経済ニュースと株価の変動を実感的に理解させることができる。
- ・ その後のゲームとして、株式学習ゲームなどを用意している。利用してほしい。

### 篠原先生のコメント

- ・ この夏休み経済教室は、先生方が現場で教えられる際に、こんなことをちょっと知っているのと教えやすくなる、さらには教える内容の質が格段に高まる、と思えるような点を先生方に伝えたい、という趣旨から始めた。今の鈴木氏の解説に関しても、「株式」について教える際に注意していただきたい点に絞って簡単にコメントしてみる。
- ・ 教科書では、金融単元で実は様々な異なる「おカネにかかわるコト」が扱われている。どの教科書も、まず貨幣の定義と種類、貨幣の機能について述べたあと、一転して話は金融（ファイナンス）に関わることにジャンプする。ところが貨幣の機能から分かるように、財と財の交換を便利にする交換機能、決済や取引に使われる貨幣は、当面資金が余っている人が資金の不足している人に資金を融通する「金融＝資金を融通する」こととは、別物である。同じお金にかかわることで、貨幣（マネー）と金融（ファイナンス）は別のこと、という点を先生方はしっかり押さえておいていただきたい。
- ・ 金融（ファイナンス）に関して、企業は資金が必要。その資金を集めるにはどうすればいいか。株式の歴史に立ち返れば、その意味が簡単に分かる。東インド会社の例が原点。当初の株式は一過性。一つの航海ごとに資金を集め、成功したら利益を出資者に分配して、会社は解散するというプロジェクトファイナンス。現在は、資金を集めても、利益が上がるまでには極めて長い時間がかかる。だからプロジェクトごとに資金を集めるのではなく、会社を単位として資金を長期間融通し続ける。実際には、相手が永続的企業であるとして資金を貸し出すことになるが、その場合には、資金の受けての信用が必要。通常は、だから、大企業や、定評のある企業なら、株式を発行して不特定多数の投資家から資金を集めることができる。あるいは、個人が親戚、友人などに株式を引き受けてもらえる可能性もある。このようにして資金を集めるのが直接金融。その他に社債も同じ範疇。
- ・ そして、資金の受け手が、出し手から信用を得られない場合には、銀行などの金融機関を通して資金を調達する方法に頼る。これが間接金融。ただし、信用力のある企業でも、資金調達のコストによっては銀行借入れなどに頼るケースも普通であること。

- ・ 株式市場に関しては、上の例のように新しいプロジェクトを始める際などに、新たに株式を発行して資金を集める場合（それを新規発行、その市場を新規発行市場と言う）と、過去に発行された株式の売買を行う流通市場とは異なる機能をもっていることを、先生方には、はっきり理解しておいていただきたい。経済的に大切なのは、新規発行の場合。企業が工場や生産設備に投資したり、研究開発事業を始める上で必要な資金を集める、そしてそれが GDP を押し上げるからである。
- ・ これに対して、流通市場における株式の取引は、GDP を押し上げる効果はほぼゼロに等しい。売り手の株式という資産と、買い手の貨幣という資産を交換しているにすぎないからである。だから、流通市場で株式を購入しても、その支払代金は企業に届くわけではない。ただし、流通市場での取引が存在しないと、社会的に意味のある新規発行市場での株式取引は成り立たない。いくら信用力の高い企業が相手でも、自らの資金を永遠にその企業に置いておくにはリスクが高すぎる。いったん企業に投下した資金を、いつでも、全部でもその一部でも、換金できるなら（つまり流通市場での取引が可能なら）、安心して企業の資金を融通できるというものである。
- ・ 先生方は、たとえば株式ゲームの場合、この点をしっかり認識した上でゲームに取り掛からないと、「株式ゲームを通して企業のことが分かる」といった、ややナイーブで浅い理解を生徒に植え付けてしまう、ということを注意していただきたい。

### 3 時間目『「地理」「公民」教科書を横断する産業から企業への視点』

（講師 ト部勝彦氏 日本大学経済学部教授）

- ・ 自己紹介。専門は地図、写真を使う地理教育。
- （1）経済地理学からのアプローチの一例紹介
- ・ 大学、大学院での研究は農業地理学、フィールドワークを中心に実証的に研究。そこからのエピソードを。東京には意外と木が多い。都市部の街路樹。幕張などのニュータウンの木。いつからあるの？どこから来たの、誰が育てたの？
- ・ これは都市緑化の結果。都市緑化には様々な緑の効用が指摘されている。都市の樹木は植木によるもの。それは造園、緑化資材でもある。テーマとして植木生産地域の形成と変容を研究してきた。生産、流通、消費で調べる。地域としても調べる。
- ・ 植木生産のタイプには緑化樹、庭園樹がある。植木を生産しているのは農家。植木屋さんは剪定と移植の造園業。植木生産農家が造園業を兼業する場合もある。植木はどこでつくるのか。答えは、山ではなく畑。緑化樹の場合、大量に同じ規格のものを生産しなければならぬからである。全国での産地、関東の産地などを紹介しておく。
- ・ サツキの生産の事例（三重県鈴鹿）を紹介する。これは意外と公的なデータが少ない。

したがって現地でのフィールドワークが中心となる。その流通経路は複雑。東京あたりへのクマゼミの移動は温暖化よりも植木の移動とされている。植木は、生きたままの農産物。移植して生きてゆかなければいけない。移植地の自然条件もまた絡んでくる。

- ・ いま、植木産地の生産は減少している。一番のピークは高度成長期。オイルショック後は減る。植木は非消耗品、非生活必需品。公共工事減少で需要が激減。ただし近年、マキなどの庭園樹は中国などで需要大。

## (2) 次期学習指導要領の社会科

- ・ 2020年から小学校、2021年から中学校がそれぞれ一斉スタート。高校は2022年から学年進行。小学校3年生から地図帳が導入される。高校で必修「地理総合」登場。どの科目も「主体的、対話的、深い学び」が言われている。このなかで、深い学びが一番難しい。穴埋めのための文言を教科書から入れるためのグループ学習は深い学びにはならない。おとなになっても深い学びを続ける。その前提条件である知識、技能をいかに定着させるか。そのうえで、思考力、判断力、表現力を身に付ける。それを目指している。地理でいえば、ハザードマップを知っているだけでなく、どこにいかがハザードマップをみて対応ができるかどうかが大変になる。深い学びのためには、教員の深い知識が必要である。
- ・ 次期学習指導要領を見るときには、中学校だけでなく、小学校も見る、高校も見る必要がある。小学校で産業学習。小3市町村、生産や販売の仕事、小4都道府県、生活環境を支える事業、小5日本、農業・水産・工業・情報、小6世界の一部、それが中1で世界地理、農業地域と工業地域、中2日本地理、産業を中核とした考察、中3市場の働きと経済、さらに高校へ。
- ・ 社会的見方・考え方の追究の視点や方法をどうするか。地理的事象を扱う地理的な見方・考え方とは、どこで、何か、どのくらい、どのようにある。それはなぜあるか？他地域も同じか？空間スケールは？時間的変化は？それを地図で説明できるかがポイント。地理学は地表上の事象を真上からの視点で考える学問である。

## (3) 地理と公民の教科書をつなぐ

- ・ 経済地理学の研究成果は地理教育に反映されていないケースがある。例、北陸の電力とアルミ工業、瀬戸内での造船業の記述。常に最新動向をキャッチした教材研究が大事。
- ・ 東書版の地理と公民の教科書の農業、野菜の生産、流通、消費を事例とする。地理教科書の農林水産業。教科書を見るときは、文章よりも周辺の図表から見て行く。写真、地図などが大事。近郊農業という本文のゴシックの暗記ではなく、関東地方の学習とリンクさせて学習することが必要になる。キャベツの例では近郊農業のみならず輸送園芸としても成立し、市場との距離だけでなく、産地の気候も関わるのがわかる。
- ・ 公民的分野では私たちの消費生活の箇所、キャベツが登場する。これをあらためてフ

ードシステムで考えてみる。生産者と消費者との関係で考えることができる。同一の地域内での自給自足から地域内での分業、地域間の分化がおこり、距離は増大。さらに市場価格の問題と関連する。取れすぎて廃棄するキャベツ。東書の価格の役割のイラストにある、キャベツとたまねぎの生産はそれぞれの大産地となると代替できない。シグナルに対応できるものではない。入荷量と価格は相関がある。いまは一年通しての入荷がある。東京市場の場合、春は千葉・茨城、夏と秋は群馬、そして冬は愛知・神奈川が担い手の産地である。

- ・ まとめ 社会科の内容を連携という視点で、学年や学校種を越えてもう一度考えてみる。中学校の公民的分野では、地理的分野や歴史的分野の内容をいかにつないでゆくのがポイント。

Q：サツキが三重県になったのはなぜ？工業立地論のような例えで考えると理解しにくい。

A：三重で大量生産ができたのは、地形・土壌条件との適合や栽培技術の改良によるものではないか。また、大消費地でもある太平洋ベルトの大都市との距離の関係も絶妙で、とくに東京～大阪などでは、三重県産サツキの気候的な移植適応性も良かったのではないか。

<4 時間目>「新聞を活用した公民の授業をつくろう」講師：山根栄次（三重大学名誉教授）

- ・ 以下の指示をだして、実際に参加の先生方がグループ活動を行った。
- ・ 4人グループを作る。
- ・ 新聞記事の切り抜きを選ぶ。テーマを考えながら、何枚かの新聞記事をグループで選ぶ。はじめは多めに、授業で使えそうな記事を選択する。
- ・ 選んだ記事を基にして、1時間から3時間の授業プランを作る。
- ・ その時、授業の課題名、授業時数、指導要領や教科書で該当しそうな場所の確認をして、選んだ新聞記事を使う授業場面（例えば、導入場面、情報を読み込む場面、比較し思考する場面、意思決定する場面など）を決定、アクティブラーニングになるような仕掛けを入れるなどの工夫をしてほしい。
- ・ 時間の範囲で各グループの成果を発表。（当日は、三つの代表グループの発表を行った）

以上、文責新井